

今宝曆治水に学ぶこと ― 史実と顕彰の歩みをたどる

中西 達治

【平田家について】

▽歴史

平田家は、桓武平氏宗盛流です。初代新左衛門親宗は、島津氏久に仕え、以後島津家の重臣として歴代大きな功績を残しました。三代氏宗の次男宗勝の時本家から離れ、島津家に忠勤を尽くしています。慶長年間嫡流家の増宗が、島津家の御家騒動に巻き込まれて誅された後は、嫡流家の位牌を受け継ぎ、薩摩藩において重きをなしていました。

▽平田家系図

平田宗勝（四代略）―宗正―宗卯―正房―正輔^①―正香^{注1}―正休―正純^③
―正^④保^{注2}―正^⑤直^{注3}―鶴之助^⑥―平蔵^⑦―正風^⑧―煌^⑨二

注1 家督相続以前に病死。

注2 戸籍名は、靱負。

注3 戸籍名は、靱負。明治五（一八七二）年、戸籍制度発足の際、平田靱負第四代正保は戸籍名を靱負とし、息子の正直は兵十郎として届け出ました。明治九年父親が亡くなると、兵十郎は鹿児島県に対して、家代々の名前だからと改名願を出して、許可されています。（展示資料、平田兵十郎の改名願・許可状）二代続

けて同じ戸籍名になった珍しい例。平田家にとってこの名前が特別なものであったことがよく分かります。

補注 近代の戸籍制度では、六代鶴之助と七代平蔵、七代平蔵と八代正風の間には戸主としてハナが入ります。ハナは正直と妻トモの娘、平蔵はハナの夫。（旧姓、坂元。坂元家は、鹿児島県土族。平蔵は坂元家の三男でしたが、兄二人が西南戦争に西郷軍として参加して族籍剥奪されたため、坂元家戸主となりました。そのため、平田家の後継者が途絶えないように妻ハナを平田家に復籍させていましたが、最終的に坂元家を絶家にして平田家を継ぎました。）

▽平田靱負正輔略歴

簡単に経歴を見ておきましょう。

家（名（諱）は、はじめ宗武、後に正輔と改めています。改めた理由は、父宗房の時、江戸幕府の將軍に吉宗が就任した際、各藩に、吉宗の偏諱である宗の字を用いることを禁じる通達があったことによるものです。平田家は家老で直接関係はありませんでしたが、薩摩藩の高官であったため、祖父が宗正という名前だったことにより、その名前の中の正を取り、宗から正に文字を代えました。そのため彼も正輔と改名したものです。今回初公開された、正房、正輔の姓名判断書は、その間のいきさつを物語る貴重な資料です。特に、正輔のものには、

「旧字は宗だが、国禁により正に改める」という趣旨の言葉があつて、改名の重みが分かります。第六代薩摩藩主は、將軍吉宗から「宗」字を与えられ宗信という名前になっています。ちなみに、正輔の子正香は、正の字になってから生まれており、宗字を用いた命名ははじめからされていません。正香の諱を宗温としたり、正輔以後の子弟に宗字を用いた命名をしている次のような系図は、正房、正輔系を簡稱した偽系図ということになります。

① 靱負正輔—宗温②—宗房③—宗純④—宗静⑤—宗親⑥—六兵衛⑦—春江⑧—靱久⑨
 (薩摩義士「第十一号掲載。なお、春江氏は結婚して岩元姓。)

幼名、平蔵。元服の後、兵十郎として出仕。平田家は家格が高く、嫡子が元服する時には、藩主が立ち会い、家老職が理髪の役を務めることになっていました。展示されている「加冠」という文書は、元服の儀式の際、藩主吉貴公より、直々手渡されたものです。この時は、父正房(この時はまだ宗房)が現役ですから、父とは違う名前で出仕するわけです。以後、次郎兵衛、新左衛門、掃部を経て靱負と変わってゆきます。(兵十郎以下の名前は、年功、役職等によって許される薩摩藩内における通称。公文書の署名にも用いられるものです。)父は、新左衛門で終わっていますから、彼が如何に大きな仕事をしたかということが分かります。父正房が正輔の生まれた年に残した覚書(展示資料、後年為見合覚書)には、正房が家督相続をしたあと、父の名跡新左衛門を名乗ることを許された際、藩主にお礼を言上するについて、他の諸氏の各種のお礼言上と差し合つたため、どの家から受け付けるか順序が問題になり、それぞれの家の家格を比較した結果が記されています。薩摩藩内における平田家の位置がよく分かる事例と云えましょう。

出仕後彼は、二十六歳で物頭に任命されています。家督相続の後は、着実に藩内の役職を歴任、江戸芝邸勤務などを含め、各地の地頭職に補任され、寛延元年四十五歳にして家老職を拝命しています。彼の経歴の中で見逃せないのが、家老になった年にあつた琉球使節の江戸参府です。延享二年、徳川家重が吉宗の後を継いで第九代の將軍となります。琉球王は、將軍の代替わりに慶賀使を派遣することになりました。この年九月九日、藩主島津宗信は琉球慶賀使の具志川王子を率いて鹿児島を出発します。この時正輔は、慶賀使指揮を命じられて同行し、十一月十一日江戸芝邸に入りました。十一月十五日、島津宗信が、具志川王子を率いて登城、儀式が滞りなく済んだ後、正輔は將軍家重に拝謁、西の丸において家重の世嗣家治に対顔をそれぞれ許されています。

そうした経歴の最後が、木曾三川の治水助役の総奉行だったので。

和暦	西暦	月日	事項
元禄一七	一七〇四	三 一八	父宗房、藩内の藩士序列に関する覚書を作成。
／宝永元		八 二三	誕生。
正徳二	一七一二	四 一五	元服。藩主島津吉貴が親しく加冠、家老島津久明が理髪の役を務め、兵十郎という名を許される。
享保三	一七一八	四	父宗房、將軍徳川吉宗の諱を避け正房と改名。
享保九	一七二四	二 一三	正香生まれる。
享保一一	一七二六	四	宗武、正輔と改名の姓名判断。
享保一四	一七二九	一〇 二五	物頭。(島津継豊の命)
享保二〇	一七三五	二 二	正房隠居を許され、正輔家督を相続。(島津継豊の命)
元文二	一七三七		江戸芝邸において物頭。

元文四	一七三九	一二二五	江戸芝邸において、馬関田地頭職拝命。
元文六	一七四一	一一二	御用人に転任。
寛保三	一七四三	六	馬関田地頭職から勝岡田地頭職に転任。
寛延元	一七四四	一	大目附に転任。
	一七四八	一	勝岡から伊作田地頭職に転任。
		二二	家老職。(島津宗信の命)
		九	この年、大口地頭となり地頭職田千石を給わる。
		九	徳川家重の將軍宣下があり、この日島津宗信、琉球慶賀使の具志川王子を率いて鹿児島を出発し江戸に赴く。この時正輔、慶賀使指揮を命じられて同行し、十一月十一日江戸芝邸に入る。
宝暦三	一七五三	一一二五	島津宗信、具志川王子を率いて登城。指揮が終わった後、正輔は將軍家重に拜謁、西の丸において家治に対顔をそれぞれ許される。
宝暦四	一七五四	一六	島津重年、伊勢・尾張・美濃三洲の治水助役を命じられる。
		二九	正輔、助役総奉行に任命される。
		三	鹿児島を出発。
宝暦五	一七五五	三	美濃安八郡大牧村の旅舎に入り、工事を監督する。
		五	正香歿。享年三十二歳。
		二二	大牧村の旅舎において命終。享年五十二歳。
		二五	遺骸は輿で伏見の大黒寺に送る。
		二七	大黒寺に埋葬される。法号高元院殿節岑了操大居士。後、遺髪が鹿児島島の妙谷寺に送られ、

六	一族の墓域に葬られる。
八	薩摩藩より大黒寺に対して位牌をはじめ平田鞆負供養のための品々が贈られた。

【木曾三川お手伝い普請の命下る】

▽お手伝い普請

お手伝い普請とは江戸時代、幕府が行う大規模な土木工事のために、労働力、資材、あるいはこれに代わる金品を大名に負担させる制度で、軍役と同じ位置づけになります。工事は、幕府役人の指示のもとで行われ、大名は割り当てられた普請場に監督、警備のため家臣を派遣し、工事の進行、資材の収集、人夫賃の支払いなどにあたりました。

▽薩摩藩の対応

薩摩藩は、関ヶ原の役には西軍に属しながら、参戦した島津義弘以下の軍勢は無事国元に帰国、所領を全うして江戸幕府でも西国の雄藩として重んじられてきました。表高は七十七万石でしたが、薩摩藩は初で計量していたため、実質収入はその半分位でした。そのため、参勤交代や江戸との二重生活などの費用については格式を整えるために苦労しており、工事開始以前に既におよそ六十六万両の借財があったといわれています。

幕命を受けた薩摩藩は、翌年一月十六日、派遣役人を決定、一月二十一日には請書を提出、同じ日江戸から留守居役山沢小左衛門以下が美濃大牧に向けて出発しています。一月二十九日には、鹿児島から平田鞆負以下の藩士が出発しました。この日程を見ると、江戸屋敷は、国元に情報を送る旁ら出役を前提として着々と準備をしていることが分かります。幕命を理不尽として抗命を主張する藩士に対して、災害に苦しんでいるのは同じ同胞ではないかといって平田鞆負がことをお

さめたというドラマで有名な大広間大評定の場面は、事実には遠い話だと云えるでしょう。

出役した藩士には、河川工事という特殊性から、藩内の治水工事の専門家が多数含まれていたと思われまます。宝暦治水のあと、薩摩藩内の河川改修に、この時の経験が活かされているという言い伝えがいくつもあります。

彼らは、途中小倉から海路で大阪に向かい二月十六日到着、平田鞞負は上方における金策のためしばらくここに滞在することになり、本隊は大牧に直行して江戸から来た家臣団と合流し、二月二十七日には総奉行不在のまま鞞入れ式が行われました。この間、二月十八日付けで、幕府に提出された役職者名には、総奉行以下、鹿兒島から九名、江戸から五名が派遣されるとしており、江戸と国元との間で緊密な連絡が取られていることをうかがわせています。この時派遣された薩摩藩士はあとから派遣された人々を含め、家老、大目付以下足軽まで士分格総勢五百六十七人、その他出役した藩士の家人、下人三百八十人、併せて九百四十七人、これに医師などが随行したといわれています。彼等はいっせいに全員が出役したわけではありません。応援で出てきた人もあり、入れ替わって国元に帰る人もあり、総勢で分かっているのがこれくらいということですが。

こうした出役には、上士は自分の家臣団を率いて出掛けることになっています。身の回りの世話をしてくれる人、私設秘書役などが同行するわけです。犠牲者の中に、平田氏の家人とか、下人とかいう注の付いている人達がそれにあたります。

当初の見積もりは、およそ十万両ということでしたが、実質十四、五万両に及ぶと幕府自身も考えていたようです。工事実施にあたって予定変更や追加工事などが相次ぎ、薩摩藩は最終的に予想外の出費を強いられることになりました。

薩摩藩では、即座に費用捻出のために俸禄削減、増税など緊縮財政を実施する一方で、手元資金確保のため平田鞞負は、新たに大阪で借入金を追加、工事現場に赴きました。お手伝い普請は、別名お救い普請ともいわれます。水害に遭った地元の農民に作業をさせるからです。水害で生活が苦しい農民にとって安定した収入が得られるまたとない事業だったのです。

▽資金調達の方法

ここで注目していただきたいのが、薩摩藩の資金調達方法です。とりわけ大切なのは、鹿兒島からの第一陣が出発するまでの間に、俸禄カットをはじめ、藩債・献納金・藩費節約・増税等の対応策を矢継ぎ早に実施していることです。私たちはややもすると出役した藩士達の現場におけるトラブルなどによる苦難に目をやりますが、実はこの時、薩摩藩内では、藩士、住民すべての人達がこれまで無かった窮乏生活を強いられ、生活苦にあえいでいたのです。薩摩藩内の人々がこうした苦しみにあえいでいる時、治水工事の受益者である農民は、水害による生活苦を救われていたばかりか、工事の手伝いによって臨時の収入をも得ていたということです。薩摩藩民のこの苦しみは、工事終了後も続きます。私たちの慰霊と顕彰は、平田鞞負をはじめとして工事の犠牲となった藩士に対して向けられているのですが、工事の背景には、こうした藩民すべてが受け入れていた苦しみの共有ということがあったということを忘れてはなりません。

和暦	西暦	月日	事項
宝暦三	一七五三	五	幕府代官吉田久左衛門、木曾・長良・揖斐三川調査。
		八	濃尾地方大洪水。
		一一六	幕府勘定奉行一色周防守、老中堀田相模守に

宝暦四		
一一二	二二五	治水工事の設計書、絵図面を提出。 幕府、木曾川治水工事のお手伝いを薩摩藩主 島津重年に命じる。
一	一六	家老平田鞠負を工事総奉行、大目付伊集院十 蔵を副奉行に任命。
一	二二	薩摩藩主、請書を提出。この日、江戸より第 一陣美濃に出発。
二	二九	平田鞠負、薩摩藩士の一隊を率いて鹿児島を 出発。
二	二七	歟入れ式が行われ、春の工事開始。
閏二	二九	平田鞠負、工事費七万両を工面して美濃大牧 に着く。
四	一四	永吉惣兵衛刃傷死。同日、音方定淵も死亡。 薩摩方の最初の犠牲者が出る。
五	二二	内藤十左衛門切腹。
六	一一	春の工事終了。
七	五	濃尾地方大洪水、薩摩方復旧工事を命じられ る。 藩主重年、世子重豪をともない参勤の途中、 一之手の工事場を巡視。
八	二二	濃尾地方大洪水、薩摩方復旧工事を命じられ る。 この頃病人続出。幕府から石集めの厳しい督 促を受ける。
九	二四	秋の工事開始、油島堤防の下埋め工事開始。
一一二	一八	二之手工事完成。このころ、大樽川洗堰工事 開始。

宝暦五		
一七三	二七	一之手、四之手工事完成。
三	二八	三之手工事完成。
五	二二	全ての出来ばえ検分終了。
六	二四	平田鞠負、国もとへ工事完成を報告。
九	二五	平田鞠負、美濃大牧の本小屋で命終。
	一三	幕府、藩主重年の功を賞する。
	一六	藩主重年死去。
	五	幕府、伊集院十蔵ら薩摩藩士の功を賞する。

現地入りした薩摩藩士を待っていたのは、木曾三川に翻弄されている地元住民の悲惨な現実でした。治水のための設計図と工事見積もりは、幕府が作成しています。対象になっている地域は、美濃、尾張、伊勢の三国にまたがっています。現在の新幹線岐阜羽島駅の辺りから、長島、桑名、多度辺りまでがその中に含まれているのです。工事の内容は、大きくいって、水害によって破堤した部分の復旧にあたる急破普請、堤防のかさ上げや川底の浚渫しゅんせつなど、通常の堤防の補強、メンテナンスにあたる定式普請、水行管理のため新たな施設を築造する新規普請に分かれますが、この宝暦治水工事では、それらのすべてが複合的に実施されているのです。

▽工事の概要

工事は大きく四つの工区に分けられています。中身をみると洪水で破堤した場所の復旧、弱い堤防の補強工事、高くなった川底の浚渫、急激な増水に対して川の流れを弱めるため、猿尾さるおや洗堰あらいと呼ばれる施設を新設する工事、さらには合流している二つの流れを分流するための背割り堤を築くことなど、河川工事のあらゆる内容が一時に施工を待っていたのです。その中には、佐屋川の川底を浚渫して、木曾川の水流の一部をそちらに回すという工事もあったのです。これらは木曾三川の水流を

全体的に見通した初めての工事であり、三川分流という近代治水史に記録されるような大工事です。しかも本来ならば地元の自普請、国役普請にあたるような工事までこの際とばかりに押しつけられた形跡があります。施工のための人の手当、資材の調達、どれをとっても大変な作業です。その見積り通りに事が運ばなければなりません。現地の状況はそんなに単純なものではありませんでした。川の流れの強さ、堤防の強弱、現地住民の対応、いずれも現場毎に様子が違ってきます。中には、工事を始めた後で破堤した堤防の復旧工事まで追加されることもありました。工事の途中で、地元住民同士の意見が食い違って、工事を変更するという事態もありました。大樽川、油島の縮切はもとの設計図には入っていませんでした。住民の要望によって追加された工事だったのです。大樽川の洗堰は、もともと締め切るようになっていました。千本松原の堤防は、現在は締め切られて一本につながっていますが、宝暦治水の際には、食い違い堰で、中間があいていたのです。設計図では、現在の形と同じだったのですが、工事を始める直前に、いずれも上流や東側の住人から、締め切って長良川や木曾川を分流すると水上交通が不便になり、水害も起きやすくなるという抗議があつて、いろいろ議論の末、江戸の責任者の裁決で、とりあえず、最下流を空けておく食い違い堰という形で決着したからです。

▽難問だった資材調達

地元住民を使用するの工事には、農繁期には工事を中止するという条件もあります。工事途中で新たに決壊した堤防の復旧まで、関連工事としてしなければならぬこともありました。そうした事態にきめ細かに対応して、一々幕府方の役人と調整しなければならぬのです。現地で調整がつかない場合には、前の油島の例のように、一々江戸の総責任者までお伺いを立てなければなりません。もっともそれらは、交渉で解決できます。平田靱負にとってもっと厄介な問題がありました。特に大変

参考1 宝暦治水工事に要した資材品

材 料	数	量
木材	120,743本	長さ3間半(約6,3m) 木口1尺4寸(約45cm)
木林(幕府側)	5,816本	長さ6間5尺(約12m) 目通り5尺3寸(約1,6m)
粗朶(そだ)	700束	
唐竹	1,728,709本	目通り5~6寸(約16cm)
葉付き竹	14,135本	目通り4~5寸(約14cm)
石材	41,724坪 ^{注1}	(約243,333m ³)
砂利土	203,403坪	(約1,186,246m ³) ^{注2}
かずら	10,501房	(約315km)
空俵	162,870俵	
縄	55,404房	(約1,662km)

注1 立方坪。1,8の3乗m³。

注2 ナゴヤドーム(13,400m³)50個分の広さに、1,8mの高さの盛り土の出来る量。

参考2 総工費

借入金 220,298両

藩債・献納金・藩費節約・増税等 150,000両

(当時の薩摩藩の年間収納米の二倍以上。伊藤信『宝暦治水と薩摩藩士』による。)

だったのが、資材の調達と、俗にお救い普請といわれていることでも分かるように、地元民の生活支援のため地元民を優先して使用しなければならぬといういわゆる村方請負という制度でした。参考資料として、この時の工事に使用された資材の一覧表をごらんください。この膨大な資材を、工事の進み具合に併せて、ジャストインタイムで調達しなければならなかった担当者の苦勞は察するにあまりがあります。一例として使用された土砂の量に注目してみてください。何と現

在のナゴヤドーム五十個分の広さに、一・八呎の高さの盛り土をしたと同じだということです。これだけの量を地元でまかなうことはとうてい出来ません。ダンプトラックもクレーンもない時代です。小さな川舟で遠くから運び込み、手作業で積み卸したわけです。ちなみにそうした量をどのようにして量ったのでしょうか。始めにきちんと重量を量った土砂を船に乗せ、その喫水線を確認します。資材を積み込む際には、その喫水線を目安にするというわけです。石材、木材などの資材も同じようにして集められました。遠く木曾川の上流や長良川の上流まで広い範囲からの材料が、最下流の工事現場に運ばれたのです。需要と供給の関係が、うまくバランスがとれていないときには、当然ですが、資材は高騰してゆきます。何としても工事を完成させなければならぬ薩摩藩の苦勞は、並大抵ではありませんでした。幕府方役人が、石材の集め方が悪いと、督促している文書が残されています。現在でもよくある、工事費の中抜き、ピンハネなどを防ぐと同時に、足元を見て値段をつり上げる悪徳商人の迷惑に、誠実に対処する総奉行平田鞆負の目配りは、並大抵ではなかったはずで、費用は、日をおってかさむばかり、そのたびに鞆負は国元にたいして、藩には資金が全くないことが分かっているにもかかわらず、資金を送って欲しいと訴えています。藩全体がこの工事をバックアップしていることがよく分かります。

▽藩士の苦しみ

藩の血税を使った工事であるということは、藩士誰もが痛感していました。藩主重年が工事現場を訪れた際、家臣の一人が、随行した藩士に、幕府方は、何分約子定規で建前優先なので、物入りがかさむ、現場の裁量に任せてもらえば、ずっと安く上がるという不満を漏らしています。こうしたことを取り上げ、殊更に幕府が薩摩藩を痛めつけたととる向きもあります。これはそうではなく、一度立てた計画はそのまま実行するという、御役所仕事と考えるべきでしょう。責任問題は、幕府側の

役人にとっても同じことでした。展示資料中、幕府側の役人が提出した誓約書に注目して下さい。彼等にとっても、工事を滞りなく完成させることがどんなに大切なことだったかが分かります。工事をわざと遅らせたとか、完成した工事現場をこっそり打ち壊したなどという話は、殊更幕府側関係者を悪者に仕立てるための作り話だということです。薩摩藩ばかりでなく幕府側からも犠牲者が出ているのはそのためです。内藤十左衛門の口上書きという資料があります。彼は幕府側の高木家家臣ですが、切腹後しばらく生きていたため、取り調べを受けました。その時の調書です。彼は、工事場所を幕府から派遣された検査官に注意され再工事をさせたのですが、命令を受けた地元の庄屋が言うことを聞かなかったため、主家に迷惑がかかるからという理由で切腹したと述べています。武士にとって、自分に任された仕事を全うすることが、いかに大切なことだったかがよく分かります。彼はまた、自分が宿泊した村の人達に、幕府側役人の処遇について、一汁一菜、物を差し出した時は必ず適正な代価を受け取るようになど、きびしいお触れを出しています。小説や演劇などでは、薩摩藩士の待遇についての申し渡しが、余りにもきびしいという場面がありますが、実は幕府側の役人にも、同じような命令が出ているのです。

▽病死者続出

工事現場にあって、農民たちを指揮する藩士の生活は、幕府の命令もあり、非常に質素なものでした。南国の風土で育った人々にとって、低湿地の仮小屋暮らしは、耐えがたく苦しいものだったに違いありません。平田鞆負が国元に送った書状の中には、病死者が多数出ているので、至急追加人員を派遣して欲しいという内容のものがります。工事を監督する幕府側の役人に対して、薩摩藩の工事責任者からは、病死者が多数出ているという補充が間に合わないの、しばらく減員のままで工事を続行したという願書も出ています。病死者が多数出たと云うことは、そうした

劣悪な生活環境によると思われます。

▽町方請負と村方請負

幕府の命令は、工事は、地元住民優先の村方請負とするというものでした。しかし、河川の工事には、専門の工事職人の手を借りなければどうにもならない部分があります。この時も、遠く駿河の大井川辺りから川職人が来ていました。ところが、村方請負の結果、賃金が一歩人と同じ程度に抑えられていたため、これでは仕事にならないと、職人達が帰国してしまおうという事態が起きてしまいました。平田鞆負は、幕府役人との粘り強い交渉の結果、一部を専門職に委ねる町方請負に変更し、何とか事なきを得ています。この辺りは、琉球の王子を引き連れて江戸に行き將軍に拜謁した平田鞆負の外交官としての経歴が生きています。

▽工事の完成と平田鞆負

宝暦四年十二月十八日、まず尾張の梶島村から伊勢の田代輪中まで、十四か村にまたがる二の手の工事が完成します。翌年三月二十七日には、美濃桑原輪中から尾張神明津輪中まで、十三か村にまたがる一の手、伊勢金廻輪中から海落口浜地蔵まで三十か村にまたがる四の手工事が完成、翌二十八日には最後に残った美濃墨俣輪中から本阿弥新田輪中に至る三の手工事も完成し、すべての工事が終わりました。

五月二十二日工事の検分をした幕府の役人は、

「お手伝いご普請、けっこう出来致してござる。」

とそのできばえを称賛しています。薩摩藩士の苦勞が報われた瞬間でした。

この結果を平田鞆負は、早速国元へ、

「ご普請どころ、首尾よくご成就にて、できばえご検分までもお滞りなく相済み、お手伝い方お引き取り仰せ渡され、先ずもって重畳の儀に存じ奉り候。」【工事は首尾よく完成し、検分も滞りなく済み、工事場所を引き取るといって貰えたので、こんな喜ばしいことはございません。】

と報告しています。

その翌日、出役した藩士達が、国元へ、江戸へとそれぞれ帰り支度に忙しい中、彼は大牧の役館で命終したのです。時に鞆負五十二歳、遺骸は即刻船で桑名に送られ、桑名から伏見の大黒寺に輿で運ばれました。二十七日埋葬、翌月八日には、薩摩藩から位牌をはじめ供養の品々が黒寺へ贈られています。幕府に対して薩摩藩の名譽をはずかしめなかった功勞者として、手厚くもてなされていることが分かります。先の偽系図を載せた文中で、平田鞆久氏は、「治水工事に加わった者は決して功勞者ではなかった」といい、同じく「薩摩義士」十六号では、「当時四千字の禄高であった平田鞆負でしたが、割腹以来その遺族は家禄を薩摩藩に奉還し、資財も処分して薩摩藩が被った借財の足しにしました。」と記しています。これは全くの事実無根です。第一、美濃の各地にある墓碑は、すべて総奉行と副奉行の指示によって作られているはずで、幕府の命を受けた工事において、薩摩藩の名譽のために命を落とした人々を、功勞者として遇しないわけがないのです。

▽宝暦治水工事の意義

もともと木曾三川の下流部一帯は、三川の上流から運ばれた土砂が堆積する湿地帯でした。そうした地域に新田が開拓され、輪中が形成されていったのです。新田開発の度に遊水池は減少しますから、洪水が発生するのは必然的な成り行きです。一元的な河川管理の下での水利事業が必要とされるわけです。ところが近世の領主制では、それぞれの地域住民の利害に領主の意向が重なり、調整することに限界が生じていました。この宝暦治水は、そんな中で初めて木曾三川を統合的に捉え、中流部から下流部にかけての水利を念頭に置いた工事計画だったということが出来ます。こうした大工事が、薩摩藩に命じられたのです。工期は一年、人夫は基本的に地元住民を使うこと、農繁期は休業、膨大な資材を集める輸送手段は殆ど水運に頼るしかありません。地域住民は復旧のために

自腹を切らなくてもよければかりか、逆に人夫賃という日銭が入るのです。地元が如何に潤ったか想像に難くありません。新規工事には、その工事によって効果が期待出来る地域Ⅱ益村と、不都合が生じる地域Ⅲ障り村とが出来ます。そういった地域の調整には、こうした統一的な視野に立った工事の施工が必要になります。平田鞞負以下の薩摩藩士達は、こうした問題をひとつひとつ解決、完工にこぎ着けたというわけです。急破普請や定式普請は、工事完成と同時に忘れられてゆきます。新規工事については、その工事の結果生じる事態について、以後も丁寧な維持管理と機能調整をしてゆく必要があります。佐屋川の川底の浚渫については、地元民には何の影響もなかったでしょう。工事自体も忘れられてゆきます。その他の地域でも事情は同じです。桑名の大山田地域や、美濃の八神、立田の辺りにも、工事の跡は残っています。大樽川の洗堰は、完工直後に、堰の西岸が破堤し水流が変わってしまっています。そのため後年元の位置よりさらに下流部に薩摩堰の石材等を使って新たな堰が設けられます。これにたいして上流部からは薩摩堰のおかげで上流の水流が増えて水損が多くなったという苦情が出てきたりします。洗堰を作るについては、上流部における対応策が施されている必要があります。そうしたメインテナンスがうまく行われていたのかどうかを問うことなく、堰をつけた堤が破堤したから工事は失敗だったと決め付けたり、上流に水害が多くなったと、大樽川の洗堰自体を問題視したりする考え方がありませんが、それでは宝曆治水の全体像を見たことにはならないのです。

尾張藩家老石河伊賀守は、工事区域内に所領のあった地元当事者の一人ですが、彼は工事の後薩摩藩主にお礼をするかどうか考えているという内容の文書を残しています。工事の結果を、地元の人達がどう評価していたかを知ることの出来る貴重な資料です。

【顕彰の始まり】

▽事蹟の発掘

三重県多度の西田家は、宝暦年間には庄屋を務めており、宝曆治水工事の際、薩摩藩士や家人下人を二十数名宿泊させていました。西田家十代目喜兵衛(一八四五〜一九二五)は、明治九年地租改正に不満を抱いた農民たちが起こしたいわゆる伊勢騒動で、父祖伝来の記録などが焼失したため、宝曆治水の事蹟が埋もれてしまうことを危惧して、明治十年代の終わり頃から精力的に調査を進め、各地の関係者から情報を収集しています。宝曆治水工事の地元資料は、現在ほとんど残っていません。この時失われた資料は、藩士を泊めた家の記録という点で本当に貴重なものであったという事が出来ます。こうした記録が残されたについては、揖斐川西岸の多度地方が油島の締切工事により、もっとも恩恵を受けた地域の一つであるということがあったと思われれます。彼は積極的に地元を尋ね、鹿児島県関係者と会い、資料の収集に努めました。その時よき相談相手となったのが、桑名の海蔵寺住職、峠本慈船でした。彼は岐阜県庁に赴き、工事資料を写すなどさまざまな助力を惜しみませんでした。建碑が話題になる頃には、金銭のことには関わりないとして、一時期海蔵寺は手を引いたようですが、もともと海蔵寺には薩摩藩士の墳墓があり、この地方の顕彰活動の中心となってゆきます。後年西田がまとめた『濃尾勢三大川宝曆治水誌』には、資料が集大成されるまでのさまざまなエピソードが伝えられています。伏見の大黒寺に、墓があることを知った西田が、関係書類の有無を尋ねたところ、当初曖昧なままになつていたので、ある時突然大黒寺から手紙が来て、「調査の結果資料が出てきたが、当寺は衰退しているのでそちらで資料を保管して欲しい」と、出てきた資料が西田のもとに一括して送られてきたので、筋違いだといつて送り返したとか、碑の裏面に刻み込む人名配置などが決まり書

家にもその旨伝えてあった着工直前になって、羽島地方の人物が、廃寺となった藪の中から薩摩云々という文字の読める墓石が三基見つかった、これは記録が無いが時期的に見てこの工事関係者と思われる。ついでには、名前を追加して欲しい、費用がいるようなら負担する云々といってきたので大慌てになったとか、興味深い例といえるでしょう。この時、協力を依頼された各方面からの申告の中には、十分検証されないまま採録されたものもたくさんあるようで、今後とも調査してゆく必要があります。犠牲者の中で、今の時点でもっとも遅く発見されたのは、常栄寺の黒田唯右衛門です。その墓は、大正十四年十二月に、大牧の役館跡で執り行われた薩摩義士顕彰祭典、法要に参加した薩摩義士顕彰会会長の山田貞策等が、揖斐川対岸の今尾で発見したもので、翌年発行された「薩摩義士顕彰会々報」創刊号に報告されています。それによると、碑面は「宝曆四年甲戌七月七日 妙法宗言信士 薩州平田家内 黒田唯右衛門」となっており、黒田唯右衛門が平田家の家人であったことが分かります。ちなみに平田家では、戦国時代以来、平田家に功績のあった家臣は、一族と共に祀っており、展示資料の「平田家位牌法号帳」中に、黒田唯右衛門の名が記載されています。

問題なのは、薩摩藩士の犠牲者の死因です。碑面には死因の記載はありませんので、過去帳あるいは埋葬時の寺請け証文などがその基本資料となります。江戸時代には、旅先で死んだ場合、氏名はもちろんですが、宗旨が分かっているか死因は何か、身引受人はいるか、そうした要件が満たされなければ埋葬は許可されませんでした。寺院宛の一札が必要なわけです。寺院の一札では、海蔵寺にある永吉惣兵衛の「腰のものと怪我」という一節が有名で、これは確かに刀傷による死亡ということが云えます。ただし、これが自害なのか、刃傷沙汰によるものなのかは明らかではありません。その他の人々については、病死とあるはずですが、公表されている死因はすべて割腹とされています。幕府を懼り、平

田靱負が強い病死として表沙汰にできなかったという解釈がなされたりするわけですが、ただでさえ、薩摩側に厳しいとされる幕府の支配下にある地元の寺院が、薩摩の嘘をそのまま見過ごすわけはないでしょう。そんなことをすれば、その寺の存立に拘わる大事件になります。これなどは、明治三十年頃という時代のおかげが大きく影響しているように思われます。時あたかも日清戦争と日露戦争の中間地点、戦死こそ美德であり、戦病死はふがいないなどという風潮があった時代です。割腹が病死に代わったところで、工事のために命を落とした人々の位置づけが変わるわけではありません。中には過去帳に記載があるということで、埋葬者全員が病死という寺院もあります。今一度、犠牲者の確認とその死因については、それぞれの寺院の記録の有無、墓碑の状態など精確に調査すべきであると思われまます。

▽宝曆治水之碑の意義

明治二十年、明治政府は、オランダ人技師ヨハネス・ドレイケを使って木曾三川分流工事を始めていました。西田は集めたデータをもとに、記念碑の建設を計画、その工事責任者等にも働きかけ、ついに明治三十三年四月二十二日、時の内閣総理大臣山県有朋を招いて長良川上流の成戸で行われた三川分流成工式に引き続き、下流の油島において「宝曆治水之碑」の建碑除幕式が行われました。この碑には、薩摩藩士の他、幕府側の犠牲者の名も刻まれており、碑の名前が示すように単に薩摩側の犠牲者を慰霊するのではなく、三川分流という画期的な工事を達成した記念碑という趣旨がこめられていると云えるでしょう。西田はこの時の経過を『濃尾勢三大川宝曆治水誌』（上・下）として、明治四十年十月三十日に出版しています。

【全国的な高まりを見せる顕彰活動】

▽岩田徳義の活動―犠士から義士へ

西田喜兵衛の努力により世に出た、宝暦治水の事蹟に感激した岩田徳義は、西田と共に調査顕彰を進めてきた金森吉次郎等の働きかけを受け、明治末年頃から、工事犠牲者を薩摩義士として全国的な顕彰活動を展開します。彼は、薩摩藩士の犠牲者たちを赤穂浪士の義挙に準え、盛んな啓蒙活動を行いました。彼は平田靱負に対する位記の追贈を願い出ており、その結果大正五年、従五位が追贈されました。彼はその後鹿兒島地方の人々と連携して自ら講演し、あるいは、浄瑠璃台本を制作して舞台にかけるなど、宝暦治水の事蹟の宣伝に大きな役割を果たしました。こうして現代に至る流れが出来上がっていったのです。

▽鹿兒島―薩摩義士顕彰会の発足

大正五年、平田靱負に贈位の沙汰があったことをきっかけにして鹿兒島報徳会は薩摩義士顕彰会の設立を発起、大正六年四月の義士祭典を機に募金活動を始めます。大正九年には城山山麓に工事のいきさつを記した宝暦義士碑と、薩摩義士小碓碑が建設されました。この時は、内藤十左衛門と竹中伝六が、中に混じっていました。現在、内藤十左衛門の小碓は、向かって右脇奥の最下段に移されており、元の位置には、遅れて発見された、黒田唯右衛門のものが置かれています。鹿兒島薩摩義士顕彰会は、精力的に事蹟と子孫の調査を進めました。大正十三年には、鹿兒島県下一帯に宝暦義士についての調査顕彰依頼の文書を配布、子孫が分かっている場合には個別に調査依頼をしてその結果をまとめました。先に見た平田靱負正直の娘ハナの下に寄せられた調査依頼とその回答の控えは、この間のいきさつをよく示しています。この時平田家の子孫ははっきり確定されており、どこからも異議、苦情の申し立てはありませんでした。こうした顕彰会の活動があったことも知らず、連綿と続く嫡流家があり、平田靱負と一族の墓があるのに、そのことには全く無関係な人物が、昭和四十年代の末になって、地元鹿兒島から子孫として名乗り出るとは、誰も思ってもみなかったことでしょう。

大正十四年には、薩摩義士碑常夜灯が設置され、翌十五年には、薩摩義士顕彰会会報が創刊されるなど、顕彰の雰囲気は一気に盛り上がりを見せます。

▽京都伏見大黒寺

薩摩義士顕彰活動が盛り上がる中、平田靱負が埋葬されている京都伏見の大黒寺に、大正八年十一月、薩摩義士碑が建設され除幕式が盛大に行われました。

▽三重県、桑名・海蔵寺を中心とした活動―鹿兒島と並ぶ戦前の活動の中心

西田喜兵衛と共に、初期の薩摩義士の事蹟発掘、顕彰活動に尽力したのが、桑名海蔵寺の住職時本慈船と弟子の林竹船です。彼らは、先にも述べたように事実調査のため、岐阜県庁まで出掛けて古記録を写すなど、積極的に資料収集に努めます。そして海蔵寺に残された墓碑や埋葬証文などを紹介、絵葉書を数度にわたって発行したり、地元で働きかけて桑名義士会を組織するなど、いろいろな事業を展開しています。大正十四年桑名義士会は海蔵寺境内に薩摩義士忠魂堂の建設を計画、忠魂堂は昭和三年落成しました。この堂内には、平田靱負の子孫の平田ハナの写真をもとに作成された平田靱負木像が昭和四年に安置されました。昭和六年には、鹿兒島における内国博覧会にあわせて平田靱負木像が鹿兒島に送られ、一大イベントが実行されました。現在木像は、海蔵寺本堂内に安置してあります。

▽岐阜県

大牧の役館跡、羽島地方など遺蹟がある場所を中心に徐々に顕彰気運が盛り上がりました。山田貞策等の主唱で、岐阜県下にも大正十四年薩摩義士顕彰会が組織されます。養老町大牧にあったこの顕彰会では、役館跡に、海蔵寺と同じような忠魂堂の建設を計画しました。昭和七年には、平田靱負翁終焉地碑が建設されます。この碑の完成を記念して発行

された『宝暦治水薩摩義士事蹟概要』の口絵には、現在建っている平田靱負坐像と同じ形の木像写真がおさめられており、義士堂内に安置する計画だとありますが、結局この堂は建築されませんでした。ちなみに役館跡に行きますと、現在では二百五十年を記念して製作された大型の立像に目が行きがちですが、小高いところに置かれている、陣笠をひざにのいた穏やかな風貌の小さな坐像こそ、工事現場を見回っていた総奉行の面影を残している大切な像だと云えます。

▽海津の歩み

◆郡役所編『薩摩義士之偉業』の出版と治水神社創建

宝暦治水之碑が建設された後、海津地方は、地元として特に顕彰活動に力を注いできました。大正九年海津郡役所は、『薩摩義士之偉業』を刊行します。郡役所が廃止された後は、地域の諸団体が義士顕彰の精神を引き継ぎ、戦後まで版を重ねてゆきました。大正十四年、西田喜兵衛と海津郡内有志は、島津重年を主神とし、平田靱負以下を祀る宝暦治水神社の創建を計画し、募金活動を始めました。この神社は内務省により不許可とされ、翌年工事を指揮し完工を見届けた平田靱負のみを祭神とする治水神社が許可されました。昭和十三年五月には治水神社完工鎮座の式典が行われました。

【顕彰を通じて相互提携・盟約へ―戦後の歩み】

▽宝暦治水二百年

日本が敗戦後の痛手から立ち直りつつあった昭和二十九年、宝暦治水二百年を期して、鹿児島県・岐阜県においてさまざまな記念行事が執行されました。薩摩義士の慰霊と顕彰についての新しい時代の幕開けです。

鹿児島では記念式典に際して平田家第八代の正風氏が系図と画像を初公開して大きな注目を集めました。鹿児島では二百年の記念事業として、三十年には平田家の旧宅跡の平田公園の銅像を建設、翌年には市内の甲

突川に平田橋を建設します。治水神社では、有志により寄進された宝暦治水観音堂が昭和二十八年に建設され、入仏式が行われましたが、二百年を記念して、二十九年に神社と観音堂を結ぶ単人橋が建設されました。

▽岐阜県薩摩義士顕彰会発足（昭和四十三年）

▽海津町と国分市姉妹都市盟約を締結（昭和四十五年）

▽岐阜県と鹿児島県が姉妹都市盟約を締結（昭和四十六年）

宝暦治水によって作られたきずなが新しい時代を迎え、地域ぐるみの交流が始まりました。この盟約を契機として、教育、文化、経済などさまざまな交流が始まりました。海津町が平田、南濃両町と合併して海津市となり、国分市が霧島市と合併して霧島市となった平成十八年には、新しく両市で姉妹都市盟約が結ばれて現在に至っています。

一方岐阜県と鹿児島県は、盟約四十周年に当たる平成二十三年秋、災害時における相互応援協定を結び、一層強いきずなが出来上がりました。

▽歴史研究・文学作品・芸能の影響

戦前から、さまざまな調査研究が進められてきました。大正十五年五月発行の『薩摩義士』（鹿児島教育第三百九十一号）は、その初期の成果です。その後さまざまな書物が出版されますが、概ね道徳的内容の見解によるものが多く、時代の風潮を感じさせます。その中で、伊藤信は、資料を丹念に読み解き、昭和十八年『宝暦治水と薩摩藩士』を出版します。現在でも宝暦治水についての研究には欠かせない名著です。

先にも見たように、大正七年東京新富座で上演された歌舞伎『木曾川治水記』など、戦前から歌舞伎浪曲など、さまざまな芸能が演じられて

きました。戦後は、宝曆治水二百年記念に中山義秀によって執筆された『木曾川物語』杉本苑子『孤愁の岸』豊田穰『恩讐の川面』等さまざまな文学作品が刊行され、大きな反響を呼びました。中でも『孤愁の岸』は、テレビドラマや演劇として何度も上演されています。これらの文学芸能諸作品は、あくまでフィクションであり、事実とは遠い世界であることを知っておくことが大切です。

▽市民生活に根付いた宝曆治水への思い

現在市内で行われているさまざまな行事を見てみましょう。小中学校の校歌、平田町という地名、平田公園など、平田靱負に因む地名や施設、市民生活のすみずみに、宝曆治水への思いが見られます。年間行事にも、それははっきり見て取れます。

【年間行事】

- ・ 四月三日 円成寺薩摩義士追悼法要 太田地区 薩摩義士を讃える会
- ・ 四月二十五日 治水神社春季大祭 宝曆治水史蹟保存会
舟みこし・みこし奉納 海津町大江地区ほか
- ・ 五月二十五日 治水神社献灯祭 鹿兒島県人会ほか
- ・ 七月七日 平田公園・平田靱負翁に感謝する会 宝曆治水史蹟保存会
- ・ 七月七日 常栄寺 薩摩義士追悼法要 平田町薩摩義士顕彰会
- ・ 八月上旬 薩摩義士の墓巡拝 宝曆治水史蹟保存会
- ・ 八月中旬 海津市夏祭 海津市夏祭り実行委員会
- ・ 薩摩義士追弔会 当日午前（高須別院） 海津市夏祭り実行委員会
- ・ 八月下旬 治水神社献灯祭 鹿兒島県人会ほか
- ・ 十月二十五日 治水神社秋季大祭・宝曆治水観音堂法要 宝曆治水史蹟保存会
- ・ 十二月三十一日～一月一日 治水神社越年甘酒 宝曆治水史蹟保存会

【顕彰を未来につなぐために】

こうした顕彰の成果を次の世代に受け継いでゆくためには、先人が紡いだ伝説伝承をよく理解し、そのうえで宝曆治水の全体像を正確に把握してゆく必要があります。時代が変わっても、変わらない真実、そこから真の感謝報恩の気持ちが生まれます。私たちの顕彰活動が、未来志向のきずなとして役立ち、生かされることを心から祈っています。

二〇二二年五月二十一日

注 本稿は、二〇二二年四月二十八日、宝曆治水史蹟保存会が海津市歴史民俗資料館と共催で開催した企画展「今、宝曆治水に学ぶこと―史実と顕彰の歩みをたどる―」における記念講演に基づき、内容を補足整理したものである。